

JAPAN ICOMOS / INFORMATION

INTERNATIONAL COUNCIL ON MONUMENTS AND SITES

JAPANESE NATIONAL COMMITTEE 日本イコモス国内委員会

5期—5号



CONTENTS ♣

はじめに／前野まさる 01
President's Message / Masaru MAENO

追悼
前野まさる／町田 章 02
Condolences
Masaru MAENO / Akira MACHIDA

2002年次 第2回拡大理事会報告 (6/15) / 山田幸正 03
Reports on the 2nd Meeting of the Executive Board, 2002
Yukimasa YAMADA

<懇親会・見学会・研究会の報告>
平城宮跡の見学・京奈和自動車道が平城宮跡の
地下を通る案について／上野邦一 06
A Friendship Meeting / Observation Study / Symposium
Kunikazu UENO

<研究会報告>
グジャラート地方震災後の文化遺産の調査研究計画研究会／花里利一 07
On Research Program for Rehabilitation of Architectural Heritages Damaged
by the Gujarat Earthquake of January 26, 2001, India / Toshikazu HANAZATO

<特別企画講演会報告>
南アジアの市民参加による歴史的遺産の保存について／前野まさる 09
Report on the Special Lecture for the Popular Participation
in the Heritage Conservation Movement in South Asia / Masaru MAENO

<円卓会議報告> 岡田保良 10
Report on the Round Table Meeting / Yasuyoshi OKADA

<特別寄稿>
ウベール・ギヨ / 岡田保良 11
Two Projects for the Future of Earthen Architectures in Central Asia
And Mediterranean Region- Summarized Projects Background
/ Hubert Guillaud

お知らせ／山田幸正 13
Announcement / Yukimasa YAMADA

日誌／事務局 14
Diary

はじめに
前野まさる

2002.9.30

6月15日に奈良で開催した理事会は、上野邦一氏のお骨折りで、いかにも奈良らしい雰囲気国際奈良学セミナーハウス旧興福寺塔頭世尊院客殿の畳敷きの広間で行なわれました。翌16日朝、参加者一同に共通の理解をもってもらうという上野邦一氏の気配りで、研究会に先立ち平城旧跡の見学会を行ない、研究会は午後セミナーハウスの2階集会室で行なわれました。また、若草山下手に1988年に竣工した三十三間堂のようなデザインの新公会堂の見学もしました。雰囲気のよい庭園に囲まれた心地良い会議場でした。年2回位は、このような歴史と個性豊かな各地でイコモスの理事会が開催できたら・日本イコモスの活性にも効があるのではないかと思います。

6月28日に芸大で開催したフィリピンのアテネオ大学のレネ・ピオ・ハヴェラーナ師の講演「南アジアの市民参加の歴史的遺産保存」特別企画講演会は、準備不足もあってお知らせが不十分で皆さまにはご迷惑をおかけいたしました。師がインドネシアとマレーシアで調査したウォーキングツアーのグループ活動には興味深いものがありました。

今年は第13回ICOMOS総会の年で、開催地を巡りいろいろもめました。12月1日から5日までスペインのマドリッドで行なわれることに落ち着きました。日本からは今のところ12名の方の参加が予定されています。この総会では役員選挙もあります。1999年のメキシコ総会の時の様にもめないで、スムーズな選挙であって欲しいと願っております。

足達富士夫先生を偲んで

前野まさる

去る7月11日に北海道大学の森下満氏から、足達富士夫先生が6月4日に急性肺炎のため逝去されたとのメールをいただき、驚きと悲しみを深くいたしました。

先生は1974年の日本イコモス国内委員会設立に際し故関野克先生と共に尽力された19人の中のお一人であり、また環境整備計画の観点から、地域文化財の保存・再生の問題に取り組まれ、「奈良計画」「古やまと計画」の構想を提案されるなど、奈良市・明日香地域の保全の推進に努力されました。

函館でもいち早く函館西部地区の歴史街区の価値付けをされ、伝統的建造物群保存地区指定と保存計画策定に関わってこられました。1984年にベルリンで開催されたICOMOS・UIA共催の「歴史的都市再生」の会議では函館の歴史的街区を事例に歴史的街区の価値、整備課題、保全について構想を発表されるなど、豊富な研究・実践業績により、都市の文化遺産の保存・保全・活性のために尽力された功績は多大なものがあります。

近年では、1996年にソフィアで開催された第11回イコモス総会のシンポジウムで発表をされましたが、内容は先生が長年携わってこられた函館西部地区の研究の一部をまとめられたもので、学問的研究と地域整備への住民参加のための実践を網羅しており、当大会のメイン・テーマである「文化遺産と社会変化」にふさわしいものとして大きな評価を受けられたと聞き及んでいます。

足達富士夫先生のご業績を称え、ご遺徳を忍びつつ先生の御冥福をお祈りいたします。

冥界へ旅立った佐原真さん

奈良文化財研究所 町田 章

佐原真さんが2002年7月10日に膵臓癌でなくなりました。享年70歳。7月20日の暑いさなか、全国から集まった人たちが参列した東京・千日谷会堂の『佐原真さんとお別れ会』、8月18日に大阪の大阪府弥生文化博物館で関西の

友人が集まった『やさしい情熱の考古学者佐原真さん追悼講演会』は、ともに今となっては一夏の悪夢のようです。

今から38年前の1964年、奈良・平城宮跡の発掘要員として奈良国立文化財研究所に採用されてから、私は39組の同級生として佐原さんに兄事してきました。当時、彼はすでに綿密な型式編年によって銅鐸の出現から廃絶までを見事に描き、石鏃の分析によって邪馬台国の戦争を具体的に提示した新進気鋭の考古学者だったのです。

そのころ奈文研は坪井清足・鈴木嘉吉と田中琢の3氏が、新しい歴史考古を樹立していました。佐原さんにとって本式の職場であると同時に新しい分野を前にして、縄文・弥生の研究手法を基礎にした改革案を提示し、奈良時代の土器や瓦の研究に展望を開きました。他方、考古学の研究成果を出来るだけ優しく市民に伝えたいというモットーで、遺跡の整備・資料館の展示・発掘報告書の出版に斬新な手法を提示して人々の共感をよびました。

得意の語学力を発揮して、日本が欧米の考古学から学ぶべきものを模索して、書物だけでなく研究者と連携を絶やさず新しい研究法を奈文研に導入しました。近年話題になっている年輪年代学も、佐原さんが最初にヨーロッパから日本に紹介したのが始まりでした。

奈文研での業務の合間、近畿地方で著しく調査範囲を拡大していた弥生遺跡の発掘に関与しました。その過程で遺跡の保存問題にも関わり、大阪・弥生文化博物館の建設や佐賀・吉野ヶ里遺跡の保存に尽力したことは有名です。

1994年に国立歴史民俗博物館に移られてから、組織の先頭に立つことをよぎなくされ、反戦考古学者としての立場が強調され、少し背伸びされたのではないかとお見受けしました。病巣が発見されましたが、一時的に病魔が遠ざかり公職を退かれた昨年の秋、大車輪で考古学を再開したところでした。国際的に遺跡保存を目的とするイコモスにおいては、活躍を大いに期待されていた矢先の逝去です。

ともかく、無念の極みです。合掌

2002年次 第2回理事会(拡大理事会)報告



2002年次第2回理事会(拡大理事会)が去る6月15日(土曜日)午後2時から5時まで、奈良・国際奈良学セミナーハウス(旧世尊院)で開催された。出席者は、委員長:前野まさる、理事:上野邦一・岡田保良・杉尾伸太郎・日高健一郎・益田兼房・町田章・松本修自・宮川朝一・宗田好史・矢野和之・山田幸正、陪席:村上裕道・田辺征夫の各氏で、報告事項・審議事項は以下の通りであった。

報告事項

1) INFORMATION誌第5期第4号の発行について

INFORMATION誌第5期第4号はさる5月31日付けで発行された。前回の理事会(3/23)で時間・経費の節約のため、全16ページで構成することなど編集方針が承認され、それに沿って本号の編集作業を行なったが、結局、4ページ超過して20ページとなった。5月中には発行にこぎ着けたが、当初もくろんだ5月初旬発行の目標は達成できなかった。以上の通り、山田幸正理事より報告された。

2) 第13回ICOMOS総会などについて

まず、ICOMOS総会は2002年12月2～5日の日程で、マドリッドで開催することが確定した。その前の週に諮問委員会と執行委員会がセビアで開かれることも決まった。ただし、ジンバブエ側はいまだに2002年は単なる選挙のみの会議を主張している。また、今度の総会を第13回と命名し、来年の会議を第14回とする案を本部が公式表明したことについても、ジンバブエ側は強く反発している。そこで今のところ、本部ではいわゆる総会行事のうち、来年に回すことのできるものの大半を来年回しとすることを決定した。この問題について、本部とジンバブエ国内委員会との争いはさらに発展している。

次に、本部役員選挙について、6月1日に立候補が締め切られたが、詳細は不明である。ただ、最終局面で立候補

内容が大きく変動した模様である。現時点で判明しているのは、会長候補にベツツェット(ドイツ)とルクサン(ベルギー)、事務局長候補にデイス(カナダ)とボンディン(マルタ)、監事候補にソラレ(イスラエル)、副会長候補にアラモス(アメリカ)、パーク(オーストラリア)、西村(日本)。当初パーク女史が監事に立候補する予定が、現職の副会長にとどまることを決意したようで、そのため、日本との対応が整わず、副会長候補がアジア太平洋地区から2名となってしまう、日本国内委員会としての対応が議論されなければならない。

Heritage at Riskの2001年度版が完成した模様。すでに来年の原稿依頼が日本にも来ているが、これまで2年間まったく原稿を送っていないので、今回はなんとか協力する必要がある。以上、西村幸夫本部執行委員(当日欠席)から文書により報告があった。

3) NPO法人化について

現行の日本イコモス国内委員会という任意団体としての会員から、NPO法人としての社員にスムーズに移行できるのかなど、現行イコモス規約とNPO法人の定款との整合に多少の問題点がある。東京にあるNPO法人を立ち上げるためのNPOよりアドバイスを受けている。今年12月の総会に本件を諮るため、調整作業を鋭意進めていく。以上、矢野和之理事より報告された。

4) US/ICOMOS SUMMER INTERNSHIP PROGRAM 2002について

前回理事会(3/23)において報告のあった通り、日本イコモスから小野氏(東京芸大大学院)を推薦したが、残念ながら、この件について先方(Historic American Engineering Record)より不採用の通知があったことが、前野委員長より報告された。

5) 第5小委員会(プロヴェディフ旧市街保存事業協力班)の近況について

石井昭主査(当日欠席)より、以下の通り文書による報告があった。

ユネスコによる現地調査団 Project Formulation Mission の派遣がようやく本決まりになった。当委員会はこれに対応し

て必要な作業を進めている。[現地調査団]メンバーは Todor Kretev (ブルガリアイコモス)、石井 昭・麓 和善 (日本イコモス)、Dennis Rodwell (ユネスコ委嘱専門家)、江端康行 (外務省)、Anne Lemaistre (ユネスコ) の計6名。来る6月24日から1週間、プロヴァイフに滞在し、30日に解散する予定。そのあと全員が分担してレポートの作成に当たる。

[当小委員会] 3月末以降の主な動きは次の通り。

(1) UNESCO/Japan Trust Fund を所管する外務省国際文化協力室との情報交換。主として矢野和之委員が担当。4月9日には矢野・石井・麓の3委員が同省に出向き調査団の日程などについて協議した。

(2) ブルガリアイコモスとの情報交換。主として石井委員が担当。木造建築物の保存修復に特段の関心をもつ両国イコモス国内委の共同企画が、2年を経て、徐々に実現の方向へ動きだしたことを関係者は大いに喜んでいる。

(3) 去る6月6日、前野まさる委員を含む4名が集まり第5回会議を開いた。議題は現状の総括と今後の展望であった。

6) 各国際専門委員会からの報告

◆STRUCTURE:2002年5月11日～15日にベルギー・ルーヴァンにおいて開催されたISCARSAHの会議について、提出文書に基づいて日高健一郎委員から報告された。

◆UNDERWATER HERITAGE:活動を活発化するために、メンバーを強化したい旨、荒木伸介委員より事務局に連絡があった。

◆HISTORIC GARDENS AND SITES:本年の会議はない模様である。創設者の一人であるルネ・ベシェール氏が去る6月7日に亡くなられ、そのお別れの会が開催された。本年秋に、奈良県明日香において研究会を企画中である。以上、杉尾伸太郎委員より報告された。

◆VERNACULAR ARCHITETURE:本年の会議は、当初、マドリッドでの総会后、12月6日にジンバブエで開催すると連絡があったが、スロベニアで11月頃開催される旨のメール連絡があった。以上、前野まさる委員より報告された。

◆WOOD:委員長が交代してから、カナダの事務局から連絡がなく、静観している状況であると、村上裕道委員より報告された。

◆EARTHEN STRUCTURES:来る7月にフランス・グルノーブルから専門家を招聘している。国内でこの分野に関心をもつ研究者などを集めた会合を予定している。以上、岡田保良委員より報告された。

◆CULTURAL TOURISM:開催地は流動的であるが、11月～12月頃に開催される会議に参加の方向で、スケジュールを調整している旨、宗田好史委員より述べられた。

◆RISK PREPAREDNESS:国内の体制として防災専門家を3名程度加えたい旨、益田兼房委員より述べられた。

7) 各小委員会からの報告

◆第1小委員会 (文化財保護関連憲章等研究班)

オーセンティシティに関する研究会を企画中であり、藤井恵介主査を中心に建て直しの準備中であることが、益田委員から述べられた。

◆第2小委員会 (出版協力・文化講座協力・他)

江東区古石場文化センターでの連続講演会事業について、前号インフォメーション誌において羽生修二主査より報告されている通りである。

◆第3小委員会 (歴史的建築物構造補強研究班)

上記6) 各国際専門委員会からの報告で、日高主査によって報告された通りである。

◆第4小委員会 (世界遺産条約関連問題研究班)

帰国に伴い、主査を稲葉信子氏にお願いする。東文研でのアジアの文化財保護制度に関する検討を踏まえて、研究会を企画している旨、宗田前主査より報告された。

8) インド・グジャラート地方震災後の文化遺産に関する調査研究計画報告会について

前回理事会において後援が承認された標記の報告会が、去る5月11日、東京・三田の建築会館において開催された。報告会の内容については、次号インフォメーション誌に掲載する予定である。以上、岡田理事より報告された。



下津井港 イラスト/前野まさる (以下全て)



審議事項

1) 新規入会者および退会者の承認

これまでに下記7名の個人会員の入会申請があり、審議の結果、これを承認した。

入会者（現職）	推薦者
チェスターリーブス（東京芸術大学大学院 文化財保存学客員教授）	前野まさる・矢野和之
兼松紘一郎（（株）兼松設計代表取締役）	前野まさる・田原幸夫
金井 健（奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部）	清水真一・松本修自
本田智子（（財）文化財建造物保存技術協会企画室）	伊藤延男・村上諷一
福島綾子（ペンシルバニア大学芸術大学院文化財保存コース）	田中 淡・矢野和之
重山郁子（宮崎県教育委員会事務局文化課）	矢野和之・甲斐章子
中井 泉（東京理科大学理学部応用科学科教授）	岡田保良・山田幸正

2) 会費長期滞納者の処遇について（継続審議）

前回理事会において報告のあった会費滞納者に対して、5月に委員長より直接会費請求を行なった。結果、1名からの会費納入があったが、そのほかに応答はなかった。

また、前回理事会において未納会費の完納を条件としての退会を承認したG氏からも、いまだ納入されていない。こうした状況について、慎重に審議した結果、原則3年の会費滞納を退会の意志とみなすこととした。また、1年間の会費滞納後はインフォメーション誌の送付停止、2年間の滞納後はパリ本部への登録を保留する措置をとることとした。

3) 第13回ICOMOS総会役員選挙の対応について

前述の西村本部執行委員からの報告の通り、総会における本部役員選挙に日本イコモス国内委員会として何らかの対応を検討する必要がある、この件につき、意見交換を行なっ

た。結果、西村氏の副会長擁立に向けて、韓国および中国のイコモス国内委員会宛に前野委員長名で、ファックスにより選挙協力を依頼する。また、その他諸外国のイコモス会員に対して、専門委員会など個人的な関係を駆使して運動する。今後、前野委員長を含めて総会出席予定者を中心に協議検討していくこととした。

4) チベット・ラサ市歴史的地区取り壊し中止要請について

U.S. Tibet CommitteeのNational Coordinatorと称する人物から、中国イコモスのZang Bai氏宛てに送られた標記内容の文書が、イコモスのビューロー、各副会長、各国内委員会委員長、各国際専門委員会委員長宛てに同時に送付されている。これにどのように対応すべきか審議願いたい旨、前野委員長より発言があった。これを受けて、意見交換を行なった。

理事のなかからは以下のような意見が出された。「これまでのところ、イコモスとして対応しているところはないようである。チベット独立運動との関連など中国の国内問題であり、慎重な対応が必要である。U.S. Tibet Committeeなる組織がどのようなものであるのか、など正確な情報が把握できていない。モニタリングの問題であり、直接の対応はユネスコ世界遺産会議がすべきものであろう」

とりあえず、近日中に前野委員長および矢野理事が中国に行くので、その際に非公式に情報を得られるよう努力願うこととした。

5) 平城宮跡地下の高速道路通過計画の問題について

本年5月28日付けの標記計画の撤回を求める決議文が、日本考古学協会会長より日本イコモス国内委員会委員長宛てに送付されてきたことが、前野委員長より報告された。続いて、上野邦一理事より、奈良市文化財保護審議会が反対の意見書を提出した平成12年8月18日以降の本件にかかわる経緯が説明され、「京奈和自動車道が、平城宮跡の地下を通る案について意見書」（案）が示された。

本件に関して以下のような意見が述べられた。学会などとは異なりイコモス会員のなかには民間の企業関係者もあり、そ

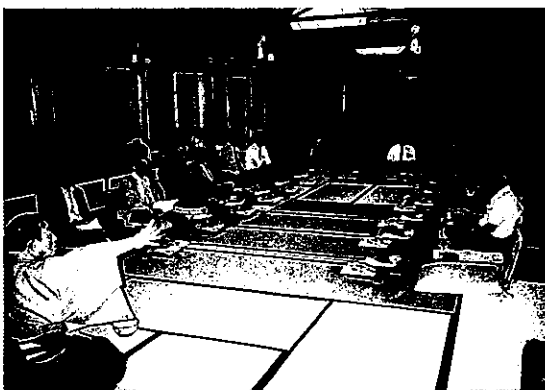
の点を留意した内容にすべきである。いわゆる懸念表明的なものであればよいのではないか。古都奈良の世界遺産登録にあたって、日本イコモスからの意見も反映されており、まったく傍観することはできないだろう。本件以外でも、近い将来実施されるモニタリングへの対応を検討すべきだ。

理事会の翌日(6/16)に開催される予定の、平城宮跡での現場見学会および本件に関する研究会において、さらに議論を深め、意見集約していくこととした。

(文責・山田幸正)



理事会は奈良学セミナーハウス旧世尊院客殿広間で



懇親会は登録文化財菊水楼で

懇親会・見学会・研究会の報告

上野邦一

15日の理事会の後、菊水楼の本館一階の広間で懐石料理をいただき、懇親会を行なった。理事以外の参加者を得て盛会であったと言えよう。宴に先だって、菊水楼主人が楼の歴史、部屋の室礼、当日の献立についての話があった。

菊水楼は春日大社・一の鳥居の前にあり、興福寺伽藍に隣接する場所にある。奈良では老舗の料理旅館で、格式ある宴などに利用されている。もとは、興福寺の子院があったところで、明治の中頃に外国人が宿泊するホテルとして開業していた。外国人訪問者が増えつつあった奈良に適当なホテルがなかったためである。菊水楼の旧本館・本館・離れ座敷は登録文化財となっている。旧本館は明治中頃の建物で、その後本館を建てたと考えられる。洋式ホテルとして建てられ、懇親会が利用した広間はかつての洋風の部屋ダイニングルームであつたらしい。

菊水楼は第二次大戦後進駐軍に接収されて利用され改造が行なわれたが、建物の本体を改変するには至らなかったと思われる。

6月15日に理事会が奈良で開催され、これに合わせて16日に「平城宮跡の地下に高速道路を通す問題」について、見学会・研究会を行なった。

午後からの研究会に先だって、現地平城宮跡を知っておこうということで、見学会は午前中に行なった。15人ほどが参加し、上野が説明を行なった。平城宮跡のほぼ中央北よりにある遺構展示館前から歩き始め、第二次大極殿跡基壇を経て、東院庭園を見学した。遺構展示館前で、平城宮跡の概要・周辺環境を説明し、奈良市街地との位置関係や全体の規模を理解した。大極殿基壇からは、復原工事が進む第一次大極殿の様子、通そうとしている高速道路の予定路線、などを認識した。東院庭園では、復原した苑地と建物群、復原へ至る資料・背景、また復原した建物の現代的利用などを見学した。

歩きながら、地下遺構の深さ・復原建物のとの位置関係・復原の根拠と限界などについて質疑・討論があった。



午後からは、見学会の参加者に数名を加え20名ほどの参加をえて、奈良学セミナーハウスにて研究会を開催した。二人の方から話題を提供して貰った。まず「平城京研究・保存・発掘・整備・復原」について、江戸時代末期からの経過・動向について、年表を資料に田辺征夫さんから報告して貰った。つぎに「木簡資料の意義」と題して木簡研究が歴史の解明にどのように貢献しているか、館野和己さんの話を伺った。田辺さんは、保存運動と調査・研究が平行して進行してきたこと、長い研究成果の上に現在の平城宮跡が広い理解を得ていることなどを強調した。館野さんは、文字史料の乏しい時代の歴史像を明らかにするような内容の木簡が、次々に発見されてきたこと、今後も平城宮跡から発見が期待されることなどを話された。

会場では「世界遺産における道路等建設問題」に関わる資料や、国土交通省が組織した「地下水検討委員会」の分析・見解が配布された。話題提供者への二・三の質問があったり、「地下水検討委員会」の見解について質疑を交わした。

「平城宮跡の地下に高速道路を通す問題についてのイコモス日本委員会の意見(案)」が呈示され、質疑応答があった。懸念を表明すること、予定路線・検討経過の資料公開請求には大方の賛成が得られたが、表明意見案については文章上に不備があるのではないかという意見があったり、どのように誰に発表するかについて複数の意見があり、一致にいたらなかった。後日懸念表明をすることで会は終了した。



研究会は奈良学セミナーハウス2階集会室で

インド・グジャラート地方震災後の文化遺産の調査研究計画報告会

花里利一

2001年1月26日に発生したインド西部地震では、伝統性豊かな様式の建築や街区が多く残されているグジャラート州・カッチ地方を中心に歴史的な建造物や居住街区が大きな被害を受けた。地震後には、それらの緊急調査がUNESCOミッションやINTACH(Indian National Trust for Art & Cultural Heritage)、グジャラート州政府によって3月頃までに行なわれ、レポートが出されている。とくに、INTACHによる調査は、歴史的建築物の被災度に関する調査シートを新たに作成して広範囲に行なわれ、全体を網羅したレポートが作成されている。

本調査プロジェクト(代表者:小寺武久中部大学教授)は、地震から1年以上経過し、地震直後の応急復旧対策から復興計画の立案と実施が必要な時期になっていることをふまえ、歴史遺産の現況を調査し、修復と再生について提案することを目的として発足したものである。今夏の現地調査を前に、現時点の情報を集約するとともに、調査の方向性を正すため、日本イコモス国内委員会および建築学会委員会(東洋建築史小委員会・文化遺産災害対策委員会合同拡大委員会)の共催により、5月11日(土)午後、建築会館で報告会を開催した。

報告会には、プロジェクト・メンバーのほか、イコモスおよび建築学会委員会メンバー計34名が出席した。最初に、代表者の小寺氏から趣旨説明があり、引き続き、活動趣旨案等について山根周氏(滋賀県立大学)、深見奈緒子氏(東京大学)、Jahnvi Nandan氏(筑波大学、インドからの留学生)が報告した。山根氏は、2001年2月末に現地調査を行なっており、「インド西部地震直後の被害状況とグジャラート地方の都市空間構成」と題して、地震直後の調査の成果を中心に都市計画を専門とする視点から報告した。また、深見氏は、「プロジェクトの概要と今後の展望」と題して、プロジェクトの経緯と調査計画、グジャラート建築の歴史と特徴などについて報告した。Nandan氏は、「震災後のインドにおける歴史的文化遗产に対する動向」と題して、INTACHの活動やASI

(Archeological Survey of India)指定建物の被害状況について発表した。各報告の後、討議に移り、出席者から多くの貴重な情報や意見が出された。

調査の姿勢に対しては、前野委員長から、歴史的街区の調査では住民との連携や住民への配慮を大切にして、成果をすみやかに地元に還元すること、歴史的建築物の保存問題では、価値の判断が重要で、5要素3原則*が基本であるとの意見が出された。調査体制に対しては、インド側との協力関係の質疑があり、プロジェクトで計画している大学や建築家との協力関係以外にも関係機関があるので、調査にあたって連絡をとるよう示唆があった。また、UNESCO等の国際支援プロジェクトに関する質疑もあり、世界銀行などが生活関連の援助を行なったが、歴史遺産はUNESCOの調査のみ実施されているとの回答が示された。さらに、グジャラート地方の伝統的な建築物や居住形態の特徴について質疑があり、耐震的な配慮がみられること、調査では中庭型住居の防災機能を対象に考えていると回答があった。一方、出席者から、わが国での歴史遺産の地震時緊急対策についての話題があった。阪神大震災以降、応急対策が行政主導で強力に進められるようになったため、解体工事の着手が迅速に行なわれ、その結果、歴史的建築物を残すことが難しくなっているとの認識が示され、この問題に対する学会やNPOによる対策の重要性が指摘された。最後に、プロジェクト・メンバーから、地震後1年以上経過した時点においても、解体せずに残っている被災した歴史的建築物の復旧支援を行なっていきたいとの意向が示された。

報告会の概要は以上の通りである。本プロジェクトでは、この報告会でのディスカッションをふまえて、モニュメント的な歴史的建築物の復旧計画とともに、伝統的な生活環境の連続性を考慮した街並みの復興指針の提案を目標とした調査研究を進める方針である。INTACHや現地で復興支援活動を行なっているNGOの協力を得て実施した今夏の調査については、次の機会に報告したい。なお、今年度の調査研究は、平成14年度の鹿島学術振興財団(研究代表者:深見氏)と平和中島財団(研究代表者:山根氏)の研究助成を受けたものである。

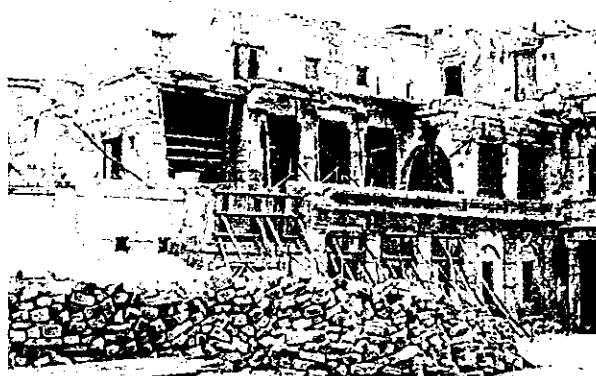
* 5要素3原則とは、前野委員長の提案であり、ものが残

る5要素として、

- 1) 芸術性
- 2) 記念性
- 3) 稀少性
- 4) なじみ性
- 5) 機能性

保存の3原則として、

- 1) 都市・建築の性能を高めること
- 2) 都市と住環境の保全を計ること
- 3) 都市・建築の価値を表すことを言う。



2002年8月調査から(被災した州指定文化財アイナ・マハル宮殿(18世紀)、ブージ市)

本建物はINTACHによる応急対策工事がNGOの基金を受けて2002年1月から行なわれ、すでに終了している。現在、恒久復旧対策が待たれている。



日本イコモス研究会の報告

南アジアの市民参加による歴史的遺産保存運動について

前野まさる

マニラ・アテネオ大学の先端芸術主任のレーネ・ハヴェラナ師は2001年に日本国際交流基金の研究奨学金を得て、フィリピン、インドネシア、マレーシア、タイなど東南アジア地域の文化遺産保存の調査をしている。日本も彼の研究対象地で、6月初旬に来日し調査している。来日に先立ち、私の友人でフィリピンの保存の運動家アウグスト・ヴィラロン氏からハヴェラナ師の日本調査で力になって欲しい旨連絡があった。私はその条件に、日本イコモスの研究会で研究報告することを求めた。6月28日に東京芸術大学で行なったハヴェラナ師の講演はその報告会である。何しろ、師は来日して以来方々を駆けずり回っていたので、報告会の日程調整が中々つかず、その結果、関東周辺の方にしか連絡できなかったことをお詫びしたい。以下、師の報告の概要をお伝えする。

師の報告のテーマは、「南アジアにおける市民参加の遺産保存について」で、来日以前に調査されたフィリピン、インドネシア、マレーシアの事例を中心に話された。

これらの国はスペイン、オランダ、イギリスの植民支配が16世紀中期からはじまり、第二次大戦後独立するが、歴史的遺産の保存にはこれらの歴史と住民の宗教とが複雑にからみその影を落としている。フィリピンではスペイン統治時代のカトリック教会が200棟ほどあり、荒れ放題であった。カトリック教会の司教の保存運動によって保存され、文化遺産の表示がなされたが、こうした保存問題は中流の人達を中心とするものであって市民の認識までには達しなかった。市民の保存運動の始まりはこの数年のことである。

〈宗教、国家、民族と文化〉

日本は外国人からは、富士山や桜、歌舞伎などが、またフィリピンはキリスト教の国、あるいは山岳地の国のイメージを持たれるだろう。キリスト教徒は全国民の90%ほどで、その影響は大きい。南のミンダナオ島にはイスラム教徒が多い。

国の休日の多くはキリスト教のものである。近年ムスリムの祭日を初めて認めた。

マレーシアの宗教はイスラム教が強く、ムスリム原理主義政党のPASが非イスラム的習慣や芸能、そして勿論ヒンズー教的なものも排除した。こうした民族の伝統の排除は伝統の忘却になり、伝統的民族文化の破壊である。マレーシアの建築はピラミッド型の高床の建築が伝統的で、昔のモスクもこうした伝統的な手法で建てられていた。しかし、ムスリム浄化運動によってこうした東南アジアの独特な形態は失われることになった。

インドネシアでは1970年代のナショナリズム運動で、コロニアル時代の建築は国民の文化ではないとし、バンドン市にあった1920～1930年代のインドネシア的アールデコ建築が破壊された。

このような宗教的理念が、政治的理念に反するとして民族や時代を象徴する歴史的遺産を破壊してきた。しかし、近年、こうしたことの見直しが始まり、マレーシアでは、中国的建築、インド的建築、イスラム建築、ヒンドゥー教建築などを保護保存する政策を取り始めた。

〈市民による文化遺産の保存運動〉

マレーシアとインドネシアで起こった市民の保存運動について、その一つ、マレーシアでは1986年、ペナン市に200人以上の活動家による保存運動のグループ：ペナンヘリテイジトラスト（PHT）が組織された。このグループはイギリスのナショナルトラストにならったもので、研究、出版、保存運動を市民の啓蒙する中で行なっている。また中央、地方行政ともネットワークを組み活動している。このグループの活動の一つに毎週火曜と水曜日にするウォーキングツアーがある。これは教育プログラムで、子どもから一般人の参加者に中国人町やインド人町を案内し、見たものを通じて教育することを狙いとしている。最終的な狙いはペナンを世界遺産にすることだが、その前提として、市民の理解と認識を育てようとするものである。

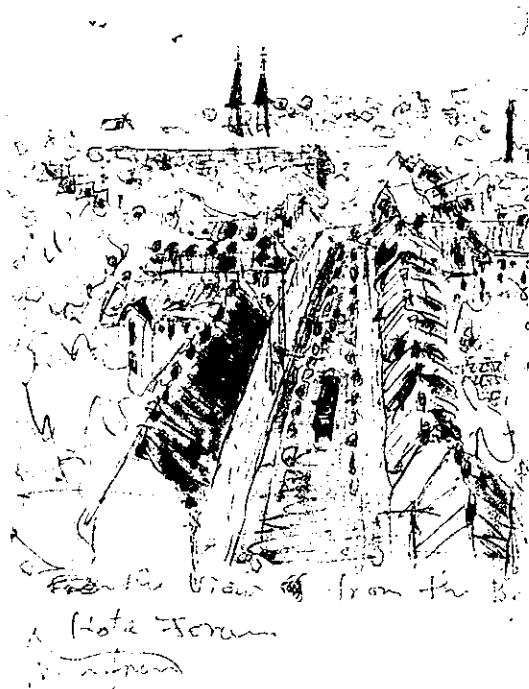
インドネシアにはジョクジャカルタのガジャ・マダ大学の教授が立上げたトラストがある。このトラストはジョクジャカルタヘリテイジトラストフォーラム（YHF）と言い、30のグループからなる。このグループは町の子どもたちや青年たちを連れて

町のツアーをし、町の歴史や美しい所を探し、見たものを通して都市の文化遺産保存の現地教育をしようと言うものである。コースはコタゲテの銀細工職人町をスタートに、モスク、墓地、オランダ人コロニー住宅地、美術館、伝統的民家村、最後に村長宅でのディスカッションとパーティで終わる。この案内人には地元の歴史を良く知る土地の人があたる。

このようなツアーと連携した歴史的遺産保存の教育手法は成功しているように思う。

フィリピンにも都市の歴史的遺産保存の運動をしている市民グループがある。ヘリテージ コンサベーション ソサィアティと言い、2000年に結成された。この組織は町の人がランドマークと思っていたアールデコの建築の取り壊しに抵抗することから始まった。

このように、東南アジア各地でナショナリズムや宗教的価値観を越えて、住民による都市の歴史的遺産の保存運動が起りつつあることが伝えられた。



◆第5回「海外における文化遺産の調査と保存に関する円卓会議」

岡田保良

本年2月20日、日本建築学会東洋建築史小委員会との共催で標記会議が開催された。

会議は1996年度を初回とし、アジア諸国を中心とする建築遺跡の調査研究あるいは文化遺産の保存事業への参画など、わが国の建築学あるいは考古学研究者の海外活動に関して、保存の哲学や技術、各国の文化財環境、事例ごとの組織作りや資金の流れ等の情報を当事者同士が直接に相互交換し、かつ次代に生かされるべくそれらの蓄積を図ることを目的として継続開催されている。また、平成13年度で終結となった「海外建築遺産調査研究活動記録」と称する科研費事業に呼応するものであった。

この第5回、会場は例年どおり建築会館会議室、参加者は約30名、話題提供者として、(株)文化財保存計画協会代表で現在日本イコモスの事務局を担当されている矢野和之氏を迎え、「日本の文化財保存手法と海外協力」というテーマを中心に据えて議事が進められた。前半は、矢野氏自身が手がけた古墳や建築遺構をはじめとする国内での保存事例や、中国長安城含元殿やアンコール遺跡などユネスコ事業による修復事業の紹介、復原展示の考え方とその方法、マスタープランの重要性が強調された。つづく後半は会議参加者相互の質疑、意見交換の場とされ、話題は遺跡整備マニュアルを活用した建築史教育、古代建築技術の復原などに及んだ。

とくに結論を求めることもなかったが、日本国内での文化財保存手法は十分海外で生かすもの、職能としてのConservation Architectの地位確立があまりにも遅れているとの印象を改めて強くした会議であった。



◆ウベール・ギヨ氏講演会

岡田保良

本年7月、フランスのグルノーブル建築学院のウベール・ギヨ教授が、金沢大学で毎年開催されている「ヘレニズム～イスラーム考古学研究会」の招きにより来日した。氏は、学院に附設された Centre international de la construction en terre (国際土構造物研究センター、通称 CRATerre-EAG) に勤務の傍ら、フランス国内のほか、イラン、ペルー、オマーン、アフリカ諸国ほか世界中を駆け回りながら、日乾煉瓦 (アドベ)をはじめとする「土の建築」の史的研究や保存技術の開発、米国Getty研究所や ICCROM との共同による「土の建築」の今日的な普及と活用という課題に長く携わっている。

氏にとって初めての来日であった今回、上記研究会第2日(7月7日)の「オリエント・地中海世界の土建築、その未来」と題する講演につづき、10日には国土舘大学において同大学建築学教室主催、イコモス国内委員会後援による「土の建築－その伝統と世界性」をテーマとする講演会が開催された。ギヨ氏自身が関わってきた「土の建築」の歴史と今日について、多くの実例を紹介するとともに、その未来への大いなる可能性を熱く訴えかけるスピーチであった。

講演会に続いて氏を囲む懇親の場が持たれ、この日参集した面々をコアとして「土の建築にかかわりのある研究者のグループ連絡網」を「アドベの会」(仮称)として立ち上げ、情報の交換、共有の手段として活用しようという動きがあることを付記しておく。

なお、ギヨ教授の幅広い活動と、「土の建築」をめぐる国際的な動向を知る一助として、今回の来日に際して用意された講演原稿のごく一部を以下に抄録する。

Two projects for the future of earthen architectures in Central Asia and Mediterranean regions — Summarised projects Background

by Hubert Guillaud

During the year 1987, the "5th International experts meeting on the Conservation of Earthen Architecture" that has been held in Rome, jointly organised by ICCROM and CRATerre, was finally recommended to push on the development of a specific set of institutional activities in this field. These activities should mainly focus on a specialised education and should support the setting up of specialised teaching programmes in academic institutions. The educational dimension of this project was justified by an evident statement shared by several international organisations: the dramatic lack of professional competencies that should be necessary for conserving a world-wide earthen architectural heritage (archaeological sites and historical buildings) threatened of destruction.

In 1989, following this recommendation, a specific project is inaugurated, jointly defined by CRATerre and ICCROM, the "Project Gaia", adopting as main objectives:

- i) the development of professional training courses;
- ii) scientific investigations;
- iii) co-operation projects and;
- iv) the dissemination of the knowledge.

From this time, four international courses on "The Preservation of the Earthen Architectural Heritage" ("PAT" Courses) will be successively organised in the School of Architecture of Grenoble (France), in 1989, 1990, 1992 and 1994. Supported by a reflection on the didactics, the pedagogy and the teaching methodologies, this initiative is growing and leads in 1994 to the creation of the "Project TERRA" that enlarges the initial partnership of ICCROM and CRATerre to the Getty Conservation Institute (GCI, Los Angeles, USA).

Considering the importance of the strengthening of specialised regional centres, this remodelled project will realise two "Pan-American Courses on the Conservation and the Management

of Earthen Archaeological and Historical Earthen Architecture" that will take place in Peru, in 1996 and 1999. They have been organised in partnership with the "Instituto Nacional de la Cultura" and its regional office "La Libertad", located in Trujillo. These courses have directly gained from the facilities of the site museum of Chan Chan, from the archaeological site itself (Chimu Epoch, 9th - 11th centuries A), and from other sites of the Moche and Chicama Valleys, "Huaca de la Luna" y "Huaca del Sol", "El Brujo". These two courses have strongly contributed to the setting up of a regional specialised centre, based in the site museum of Chan Chan, and to the definition and editing of the "Chan Chan Management Plan". They have also given an impulse to the exchanges of experiences among a larger international network of professionals (historians, archaeologists, architectural conservators, architects, cultural site managers) that has been initiated since 1989 with the previous "PAT" Courses organised in France. Since that time, this international network has had several opportunities to be gathered, thanks to successive international conferences that have been held in USA ("Adobe'90", in Las Cruces), in Portugal ("Terra'93", in Silves) and in England ("Terra 2000", in Torquay).

Simultaneously, over the past few years, the "Project TERRA", has given its support to the organisation of several other national conferences or events : in England, Italy, Germany, Czech Republic, favouring the creation of several ICOMOS "Sub-Committees on the Study and Conservation of the Earthen Architecture". The "Project TERRA" has also launched and supported several scientific research activities. Among them can be raised up the publication of a first specialised bibliography covering the field, a "Research Index", a "Literature Review", a preliminary reflection aiming at "structuring the discipline of the earthen architecture conservation", and more recently, a fundamental scientific research on the cohesion and the loss of cohesion of the earth material.

In this favourable context that has enlarged the awareness for

the conservation of earthen architectures, that has allowed the emerging recognition of a specialised disciplinary field, other several important projects are now carried out. They are confirming the commitment of much more international and national organisations in charge of the cultural heritage conservation. In this direction, such organisations as the World Heritage Centre and the Division of the Cultural Heritage of UNESCO, the Japan Trust Fund, the Getty Grant Programme, the World Monument Watch, numerous national institutions, and much more specialised experts as well as professionals, all over the world, are playing an essential part. This is resulting, among other important facts, in the entering of precious earthen archaeological sites and historical buildings on national lists of monuments, or on the prestigious World Heritage List.

This dynamic process is notably worth reading in Africa, with the commitment of numerous African Cultural Ministries, museums and professionals participating to the development of the Programme "Africa 2009". Other exemplary projects have been launched. Among them it is worth to raise up the "Chogha Zanbil Conservation Project", which has been launched in 1998, carried out by the Iranian Cultural Heritage Organisation (ICHO) and the Research Centre for the Conservation of Cultural Relics (RCCCR), in partnership with UNESCO and Japan Trust Fund. But, so many other examples could be quoted here that are very encouraging for the future of the earthen architecture conservation and "mise en valeur".

Finally, beyond this summarised presentation of the actual international mobilisations in the field, we should like to present further directions for such an encouraging future in Central Asian countries and in the Mediterranean region that have been the particular topic of this communication. Such directions are proposed in two framing projects : the "Central Asian Earth 2002/2012" Programme and the "Terra-Med" Project.



お知らせ

★第13回ICOMOS総会について

第13回 ICOMOS 総会については、すでに7月付の ICOMOS Newsletter でご存知のこととは思いますが、その日程等についてお知らせいたします。

当初ジンバブエで開催予定でしたが、総会の中核の人材であるジンバブエイコモスの会長が、UNESCO大使で転出されたり、また、ジンバブエの総会準備の遅れが危惧されたりして、会場がナバリ、マルタ、マドリッドと2転3転し、最後にマドリッド開催に落ち着いたわけです。

総会に先立ち、11月27日から29日までセビアで諮問、執行委員会が開催されます。

12月1日には参加者のマドリッド周辺のツアーがあります。会議は12月2日から5日までで、3日～4日が専門文化委員会のシンポジウム、5日は午前中そのシンポジウムの総まとめ、午後から会長、副会長、事務局長、財政委員、執行委員など18名の選挙があります。また、2003年には第14回総会がジンバブエで開催されることに決まりました。

本年の総会が成功裡に終ることと、選挙が円滑に行なわれることを祈っております。 (前野まさる)

★UNESCOより (2002年7月28日付)

Nominations for the Melina Mercouri International Prize for the Safeguarding and Management of Cultural Landscapes

文化的景観の保全・管理に贈られる標記の国際的な賞に対する候補者推薦の案内がユネスコよりきております。同賞は2年ごとに実施され、今回は20,000米ドルが2003年に贈られることになっております。詳しくは、下記のウェブサイトをご覧ください。

http://www.unesco.org/culture/heritage/prize/html_eng/index_en.shtml

なお、世界遺産リストに登録されているものは対象外です。

★ UNESCO-ICOMOS DOCUMENTATION CENTREより (2002年7月28日付)

BIBLIOGRAPHICAL DATABASEについて

UNESCO-ICOMOS DOCUMENTATION CENTREは、モニュメントや歴史的建造物群、遺跡などの文化遺産に特化し、それらの保存・修復・再生などの原則・技術・政策などに関する情報の収集と広報を行なっている機関です。本センターには現在、世界遺産リストに登録されているモニュメントや遺跡に関わる4万巻ほどの書籍、400ほどの刊行物、2万5千ほどのスライドなどが保管されております。このほど、これらのデータベース情報が、インターネットを通じて以下のウェブサイトよりご利用いただけるようになりました。

<http://www.international.icomos.org>

<http://www.database.unesco.org/icomos>

<http://www.bcin.ca> (ICOMOSのパートナーのひとつである the Conservation Information Network のサイト) このデータベースには、専門雑誌の記事や国際会議の予稿集、未刊行の技術報告書、さらには視聴覚データなども含まれております。現在のデータベースのコンテンツには、以下の専門分野ごとに1万9千以上のレファレンス項目が収録されております。 Archaeology/ conservation and restoration techniques/ cultural landscapes/cultural routes/ cultural tourism/ earthen architecture/ historic gardens and parks/ historic towns and villages/ industrial heritage/ inventories/legislation/ monuments in seismic areas/ photogrammetry/ risk preparedness and heritage at risk/ rock art/ stone and other building materials/ town planning/ training/ underwater heritage/ vernacular architecture/ wooden architecture/ world heritage monuments and sites/ etc./ all the nomination files of the cultural properties inscribed on the World Heritage List (広報担当：山田)



下津井吹上

日誌 事務局

(2002年5月1日～2002年8月31日)



2002年

- 5/1 バリ本部より2001年に入会された38名分の会員カードを受領、該当の各氏に送付
- 5/1 US/ICOMOSよりNewsletter No.1 January-Marchを受領
- 5/8 バリ本部よりICOMOS役員及び専門分科委員会の名簿をメールで受領
- 5/15 顧問の伊藤延男先生の奥様ご逝去(5/14)のため、委員長、役員一同名で弔電を送信
- 5/24 第24回全国町並みゼミ小樽大会実行委員会事務局より、昨年9/28-30に小樽で開催された大会の報告書を受領
- 5/27 バリ本部より、第13回ジンバブエ(後にマドリッドに変更)総会におけるExecutive Committee Memberの候補者を推挙するようにとの書簡を受領
- 5/29 UNESCOより「Seventh International DOCOMOMO Conference」(Sep.16-19,Paris)の案内パンフレットを受領
- 5/31 [JAPAN ICOMOS INFORMATION]誌第5期4号を発行、会員諸氏及び関係機関に送付
- 6/3 バリ本部より、2002年の負担金納入のinvoice及び今年の会員名簿(database)を受領
- 6/5 文化庁の中本 真氏より、[世界遺産条約30年企画]への参加についての書類を受領
- 6/6 第5小委員会(プロダクト旧市街保存事業協力班)を文化財保存計画協会会議室にて開催
- 6/15 日本イコモス国内委員会本年第2回拡大理事会開催(於奈良・国際奈良学セミナーハウス)
- 6/15 日本イコモス国内委員会懇親会を開催(於奈良・菊水楼/登録文化財)
- 6/16 日本イコモス国内委員会見学会及び研究会「平城京遺跡と高速度道路問題」を開催(見学会:平城旧跡、研究会:国際奈良学セミナーハウス)
- 6/21 本年分本部負担金8,560,000US\$ (1,069,792円)をバリのICOMOS本部に送金
- 6/28 日本イコモス特別企画講演会「アジアにおける文化遺産保護に関する調査から」を東京藝術大学会議室で開催(講師:マニラ・アテネオ大学レネ・ピオ・ハヴェラーナ氏)
- 7/8 第5小委員会(プロダクト旧市街保存事業協力班)を文化財保存計画協会会議室にて開催
- 7/10 「ウーバル・ギヨ氏講演会」<土の建築-その伝統と世界性>(日本イコモス後援・国士館大学建築学教室主催)を国士館大学柴田会館にて開催
- 7/10 日本イコモス会員佐原 真氏ご逝去(お別れ会は7/20に東京千日谷会堂にて行なわれた)
- 7/15 ICOMOSのpresident Michael Petzet氏より、Heritage at Risk 2001/2002 <ICOMOS World Report on Monuments and Sites in Danger> (英文260pages)を受領
- 7/15 森下 満氏(北大)より、会員の足達富士夫氏が6/24にご逝去との連絡を受領、前野まさる委員長よりお悔やみの書簡を送付
- 7/15 ICOMOS第13回総会がジンバブエからスペイン・マドリッドに変更になったのに伴い、スペイン/イコモスより総会関係の資料一式を受領。参加予定の会員諸氏にコピーを送付
- 7/17 UNESCOよりUnited Nations Year For Cultural Heritage: - Priority on Reconciliation and Development - に関するパンフレットを受領
- 7/20 UNESCOより<The World Heritage Newsletter No.34, March-April 2002>を受領
- 7/20 International Training Committee (ISC)のJokilehto氏より、同committeeのpresident, vice president及びsecretaryの交替のため、候補者推薦の依頼状を受領
- 7/29 文化財保存修復学会(会長・三輪嘉六氏)より、本年10/26開催のシンポジウム「文化財保存と修復-世界に生かす日本の技術-」の後援依頼書を受領
- 7/30 バリ本部より「Voting Procedure and Proxy Forms—the Elections at the Madrid General Assembly, December 2002—」を受領
- 8/21 US/ICOMOSよりNewsletter No.2 April-June 2002を受領
- 8/25 UNESCOよりThe World Heritage Newsletter No. 3 March-April 2002/08/26を受領
- 8/30 UNESCOのバーミヤン会議に出席された平山郁夫氏の報告会(外務省主催)に、前野まさる委員長と矢野和之事務局担当理事が出席

●日本イコモス国内委員会 理事会 JAPAN-ICOMOS EXECUTIVE BOARD

President	委員長	前野 まさる	Masaru MAENO
Trustees	理事	稲葉 信子	Nobuko INABA
		上野 邦一	Kunikazu UENO
		岡田 保良	Yasuyoshi OKADA
		杉尾伸太郎	Shintaro SUGIO
		田中 哲雄	Tetsuo TANAKA
		田原 幸夫	Yukio TAHARA
		日高健一郎	Kenichiro HIDAKA
		藤本 強	Tsuyoshi FUJIMOTO
		益田 兼房	Kanefusa MASUDA
		町田 章	Akira MACHIDA
		松本 修自	Shuji MATSUMOTO
		宮川 朝一	Asaichi MIYAKAWA
		宗田 好史	Yoshifumi MUNETA
		矢野 和之	Kazuyuki YANO
		山田 幸正	Yukimasa YAMADA
		吉田 綱市	Koichi YOSHIDA
Auditors	監事	石澤 良昭	Yoshiaki ISHIZAWA
		木原 啓吉	Keikichi KIHARA
Advisors	顧問	石井 昭	Akira ISHII
		伊藤 延男	Nobuo ITO
		坪井 清足	Kiyotari TSUBOI
		〈小委員会〉	
Chiefs	主査	藤井 恵介	Keisuke FUJII
		羽生 修二	Shuji HANYU
		日高健一郎	Kenichiro HIDAKA
		宗田 好史	Yoshifumi MUNETA
		石井 昭	Akira ISHII

●国際諸委員会参加者 REPRESENTATIVE TO INTERNATIONAL COMMITTEES

Executive Committee	西村 幸夫	Yukio NISHIMURA
Advisory Committee	前野 まさる	Masaru MAENO
Specialized Committee on:		
Archaeological Management	小野 昭	Akira ONO
Structures	岸本 雅敏	Masatoshi KISHIMOTO
	日高健一郎	Kenichiro HIDAKA
Historic Towns and Villages	坂本 功	Isao SAKAMOTO
	西澤 英和	Hidekazu NISHIZAWA
	福川 裕一	Yuichi FUKUKAWA
Underwater Cultural Heritage Training	上野 邦一	Kunikazu UENO
	荒木 伸介	Shinsuke ARAKI
Historic Gardens and Cultural Landscaps	稲葉 信子	Nobuko INABA
	工楽 善通	Yoshimichi KURAKU
	杉尾伸太郎	Shintaro SUGIO
Vernacular Architecture	本中 眞	Makoto MOTONAKA
	前野 まさる	Masaru MAENO
Wood	大河 直躬	Naomi OKAWA
	村上 裕道	Yasumichi MURAKAMI
	伊藤 延男	Nobuo ITO
	松本 修自	Shuji MATSUMOTO
Earthen Structures Cultural Tourism	渡邊 保弘	Yasuhiro WATANABE
	岡田 保良	Yasuyoshi OKADA
	宗田 好史	Yoshifumi MUNETA
Legal Issues	石井 昭	Akira ISHII
	河野 俊行	Toshiyuki KONO
Photogrammetry	西村 康	Yasushi NISHIMURA
Cultural Corridors	杉尾 邦江	Kunie SUGIO
Stone	西浦 忠輝	Tadateru NISHIURA
Risk Preparedness	益田 兼房	Kanefusa MASUDA



JAPAN ICOMOS INFORMATION

Vol.5, No.5 30 SEPTEMBER 2002

日本イコモス国内委員会 委員長 前野まさる

事務局担当理事 矢野和之 編集 山田幸正

〒150-0021 東京都渋谷区恵比寿西1-9-6 アストウルビル3階

株式会社 文化財保存計画協会 気付

Tel&Fax.03-5728-1621 e-mail jpicomos@kb4.so-net.ne.jp

JAPAN-ICOMOS OFFICE

c/o Planning Institute for the Conservation of Cultural Properties

Asutouru Bldg.,1-9-6 Ebisu-nishi Shibuyaku Tokyo 150-0021, Japan

Tel&Fax .+81-3-5728-1621 e-mail jpicomos@kb4.so-net.ne.jp